



# 立野

練馬区立立野小学校

平成26年 10月号

<http://www.tateno-e.nerima-ky.ed.jp>

## “苦手”と“嫌い”は違います

校長 岡本 昌子

1年生の給食の様子を参観しているときの事です。担任は、子供たちに、食べきれない量だと思ったりどうしても苦手な献立だったりした場合は、先に減らすよう声かけをし、そのかわり配膳された分は出来るだけ食べきるように指導していました。

全体での「いただきます」のあと、自分の給食を減らしにくる1年生は、「お魚が苦手なので、半分にしてください。」「野菜が苦手なので、少しだけ減らしてください。」としっかり言っています。1年生の段階で、【自分の食の好み】と【作ってくださった方への感謝の気持ち】の両方を感じて、きちんと自分の意思を表現しているのです。そして、自分が減らしてもらいたいと思う食材を、“嫌い”ではなく、“苦手”と表現している点が素晴らしいと感じました。

個人的な解釈も入りますが、“嫌い”は、「これからも好きになる余地がない」という印象を与えるのに対して、“苦手”は、「いずれは好きになりたい」「好きになれる可能性がある」という印象を与え、苦手意識を克服したいという想いも伝わってきます。きっと、1年生の担任も、子供たちの食の好みや食べられる量を尊重しつつも、食べ物への感謝の気持ちをもち、自分の苦手を少しずつ克服する強い子供に育てたいと思い、毎日の給食指導を積み重ねているのでしょう。

学校では、9月16日から運動会のための特別時間割が組まれ、体育の時間が多くなりました。学年での練習時間に加え全校での練習時間もあり、子供たちにとっては、忍耐を強いられる場面もあったことと思います。特に、運動に対して苦手意識のある児童や、体力に自信のない児童は、「あ～また体育だ」という後ろ向きな気持ちになったこともあったでしょう。でも、“嫌い”とあきらめてしまうのではなく、“少し苦手だけれど、友達と一緒にやってみよう”と考え、前向きに取り組むところに、子供の成長があります。

実際に、「表現(ダンス)は、最初難しくていやだったけれど、踊り方が分かってきたら楽しくなった。」「応援団は人前で大きな声を出すので恥ずかしくて苦手だったけれど、みんなと一緒にがんばっていたら、意外と楽しくなった。」などの子供の変容も見られました。

小学校時代の子供たちの心と体は柔軟で、まわりから前向きな励ましの言葉や賞賛があれば、スポンジがどんどん水を吸い込んでいくように、大きく成長します。この機会に、子供たちに様々な経験をさせ、いずれは、自分の好きなことや得意なことを選択して、自分の将来を切り拓いてほしいと願っています。

9月中旬から、学校全体で、運動会に向けてがんばってきました。いよいよ本番が、4日後に迫りました。様々な“苦手”を克服してがんばる立野小学校の子供たちに、大きな声援をお願いいたします。

(毎年のことですが 祈る!秋晴れ 曇りでも...)